

帰国してから、日本人はやっぱりだめだという思いがつのり、青年は日本人で何だろう。これでいいはずはない、日本人を造り直すことはできないだろうか、西洋に揺り動かされるだけの日本人でいいのだろうか、いろいろなおもいが彼の心の中で乱れ飛んだそうです。日本人を知りたい、知るためには、日本の土着の田舎人を考えなくていいのだろうかという思いが湧いてきたそうです。青年はその後日本村落社会の研究を始め、1943年に『日本小作制度と家族制度』という大著を公刊した有賀喜左衛門でした。

青磁の壺を見たときに、China — from, Korea — Line — color と美術ではいわれるそうですが、私にはそのようには感じられませんでした、形、線、色の三者が総合されたところにそれぞれの国の美術の特色が滲み出ているのだということを感じました。有賀の感じ方と同じでした。ものの内から一つの要素を取り出してそれを特徴と考えるなどとても現実的ではないのだという感じがしたのです。これは美術作品だけに限らないのだ、生活をなり立たせているすべての事柄は全体として一つの調和を持ち、全体の調和の中でそれぞれは存在するものなのだと感じたのです。また青磁の壺は私には悲しみの感じは与えてくれませんでした。今、手元にある壺をいくら見ても悲しみという感じは浮かんで来ないのです。あの逞しいオバチャン達の姿を見たからでしょうか。近代的工業製品も壺も料理も衣服も家屋も韓国社会の全体の中から滲み出てくるものによって特色付けられているような気がしました、有賀の研究の始まりに朝鮮社会があったように、私は日本社会を理解するために60の手習いですが、韓国社会についての勉強を今、これから始めようと思えるようになりました。私に転機を与えてくれた本当に良い旅行でした。

## 最初に訪れた外国

### —— 韓 国 ——

宇 都 榮 子

この世に生まれて最初に認識した外国の人、それは韓国の人ではなかったかと思うのです。私が、4歳から移り住んだ鹿児島県の野田村は、鹿児島本線沿いとはいうものの、駅名は「野田郷」といい、ひなびた小さな駅舎が、家から歩いて3分程のところがありました。人口6,000人程の田舎町でした。この小さな北薩の村に韓国の人が住んでいて、たどたどしい日本語を話していたという記憶だけが残っています。その方は、今はどこへ行かれたのか野田町と名前を変えた田舎には見かけなくなって久しいように思います。

今、一日として外国の人と出会わない日はない、東京という大都会に住んでいると、子どもの頃にであった隣国の人のことが、妙に鮮明に思い出されてきます。そして、日本を離れて最初に訪れた国が「韓国」であったということに、何やら因縁めいたものを感じています。

今回の「韓国企業調査」に先立つこと4年程まえに初めて韓国を訪問しました。私にとっては最初の外国訪問でした。その時の印象は強烈で、「エネルギー豊富な国だなあ」という感じをもちました。漢江のほとりにニョキニョキと林立する高層マンション群は、高島平や、多摩ニュータウンとはどこか違うのです。キリスト教会堂の十字架が、夜はネオンサインに浮かび上がるのも不思議な光景でした。高速道路の一部が、非常時には戦闘機の滑走路になるという説明も、現在の韓国のおかれている状況を示していて、緊迫したものを感じました。今回、ソウルのヒルトンホテルで、檀国大学への送迎の車を待っていた時、その日が、月に1回の「非常事態訓練日」にあたり、北からの攻撃があったと想定して非常事態発生を宣言、外出禁止が発令され、軍事演習がおこなわれ驚かされました。でも、人々はすっかりそうした事態に慣れきっているのか、動いてはならないというのに、一般の車は、走行し続けているし、南山公園を歩く人々も足を止めて避難する気配はありませんでした。

前回は旧正月の2月に訪問し、そのとき、慶州まででかけました。ソウルの駅は故郷に帰る人々でごったがえし、大変な混雑でした。その人々を相手に屋台が並んでいてにぎわっていました。何とか手に入れてもらった切符でセマウル号に乗車、大田まで行き、大田からはバスでした。慶州に着いた時は、夕方だったように思いますが、私と姪を案内してくれた韓国の知人が、ホテルを探してくれ、韓式の部屋に落ち着くことができました。オンドルの部屋に色彩鮮やかな布団を敷き、旅の疲れをいやしたのを思い出します。日本と同じように床に直接布団を敷くのですが、オンドルのおかげで、背中からほかほかと温まり、疲れもふつとんでゆくようでした。日本の布団と同じようにみえる布団もたたみ方は違っていました。お箸を使っただけの食事のマナーが違うのと同じようなものでしょう。でも、このちょっとした違いが大変な違いをうみだしてゆくのかもしれません。

今回の旅では、ソウル、慶州、釜山のいづれでも、西洋式のホテルで、日本にもあるようなホテルだったので、安心して使える反面、なんだか物足りない面も感じました。こうしたホテルで見かける韓国の人は、一般の韓国の人とはどこか違うのではないかとの思いも抱きました。昔、大学入学のため、鹿児島島の田舎から東京に出てきたとき、地下鉄の銀座線に乗る人々の顔や物腰が、銀座近くと上野近くではなんとなく違い、上野近くの人々に親近感を抱いたのを思い出します。田舎から出てきて何年かするとどこの出身かわからない都会の人になってしまう、よく言えば、「洗練された」ということになるのですが、どこか朴訥な

ところがなくなり、無機質な顔になり、感情表現が直截ではなくなってしまうのです。南大門市場のあちこちにたたずんでいる私設両替商の「オバチャン」(そう呼んだほうがピッタリ)群は、なんだか活気があって、ヒルトンホテルの人々とは違うように思いました。実は、大変なお金持ちで豪華マンションに住んでいたりするらしいのですが。

前回の旅の際に、私達を案内してくれた人はソウル育ちの娘さんでした。その彼女が、慶州からの帰りのバスの切符の入手の際、すごい剣幕で切符売り場の人とやりあったので、またまた新鮮な驚きを感じました。誰もが認める美人の彼女が、足でじだんだ踏み、声をあらげ(実は遠くから見ていたので声は聞こえなかったのですが、大きな声でまくしたてていることが感じ取れたのです)、昨日切符が残っているからだいじょうぶと言っておきながら、今になってないとはなにごとだと抗議していたのです。なんだか大変なことになっているみたいと、遠くからおそろおそろ眺めていた私と姪とは彼女の“じだんだの抗議”のおかげで、ソウルまで無事帰ることができ、翌日の彼女のお兄さん宅でのお正月の集りに間にあったのでした。釜山、南大門、慶州の市場で出会った元気印の「オバチャン」群と同じ気質がソウル育ちの娘さんにも脈々と伝わっていることを感じます。

2回の韓国への旅を通じてもっと韓国のことを学ぶ必要を感じました。儀我先生に教えていただいた司馬遼太郎の『『街道を行く』2 韓の国紀行』を帰国してから読みましたが、日本を知るためにも韓国から学ばねばとの思いを新たにしました。

“Good experience !”

広瀬裕子

釜山で解散後、私たちは再度ソウルに戻った。私達というのは、池本、高橋(祐)、鈴木(直)、西村、木幡の各氏と、私の合わせて6人である。釜山から直接日本に帰らずソウルに戻ったのは、成田—ソウルを往復した方が、たとえ釜山からソウルまでの移動費を考慮しても、だいふ安上りだったからである。

移動方法としては、長距離バスを利用する、鉄道を利用する、そして国内線を利用するという3つが現実的な方法としてあった。それぞれ一長一短で、要するに移動時間と費用が反比例する、そのどちらに価値をおくかという問題である。多少高くても(高いとは言っても国内線<釜山—ソウル>は高々6千円ぐらいなものである)時間を節約しようと、結局私たちは、国内線を使うことにした。